

## 世界の喜劇王・

# 父チャップリンを聴く

小南 長次郎

チャップリンの遺品 子息に会ってみたい

私が2月24日火曜日、東京医科大学病院で耳鼻咽喉科の受診のため、自動受付を済ませた。11時ごろスポーツ新聞を買いに病院の隣の「ホテルヒルトン東京」の地下の売店に立ち寄り、帰り際にエレベーターの前の「ステッキのチャップリン」店の横に、チャップリン生誕120周年記念のパンフレットを見付け、『あのチャップリンが日本にやってくる』に「まず魅了され手に取って読んだ。

世界の喜劇王チャールズ・チャップリン（1889～1977）の四男、ユージーン・アンソニー・チャップリンと楽しいひとときを、一緒にしませんか？ テーマは「秘められた父との思い出の数々」日本人の秘書・高野虎市の遺品、チ

ャップリンの日のパネル展を同時開催 出演ユージーン・アンソニー・チャップリン&大野裕之チャップリン研究家。

（注・正式名はチャールズ・チャップリンですが、誌上では日本流で記述します。）ご了承ください

日時は、平成21年3月18日（水）1：30～3：30。会場は、ホテル・ヒルトン東京「セントジョージ・バー」という内容のパンフレットだった。

早速、店長に話を聴き……映画だけでないチャップリンの世界に好奇心と期待を寄せ、またチャップリンの子息に会ってみたい強い衝動にかられたことは確かである。他にチャップリンの秘書を務めた高野虎市氏の遺品展、特にチャップリンが日本を訪問された様子などに興味を持った。店長との話で、私は二度ほど会ったことのある映画評論家の淀川長治氏の話を知った。「淀川先生は、映画と共に生きた人で、生涯映画を愛した人……。そして解説は軽妙で熟知された幅広い内容で、その絶妙な話術は、今も私達の脳裏に焼きついている」と。

私も、チャップリンの映画などは、ユーマアたっぷり、情熱を込めて話すので引き込まれてしまった記憶がある。

あの有名なT.V.「コマーシャル」サヨウナラ、サヨウナラ、サヨウナラ」は、淀川先生そのものだった。別名“サヨナラ”小父さんとして、今も国民に親しまれている。

入場券は限定50人という。47で予約し、昼食のため、東京都議会議事堂にある「銀座ライオン」へ向かった。次の週の3月3日火曜日、11時過ぎ、予約していた入場券をもらいに、「ステッキのチャップリン」の店を訪ねた。税込みで5300円を払い入場券を受け取った。入場券は、チャップリンのトレードマークの帽子とステッキを入れ



帝国ホテルで手を振るチャップリン一行  
(チャップリンⓂ、高野氏Ⓜ)



チャップリン(左から2人目)を挟んで記念すべき役員のスナップ

感じた。また宝物を手にした心地だった。改めて番号を確認したところ、509047でほっとし、喫茶店でくつろぎ当日のトークショーを想像していた。

### 美男子で紳士のチャップリン 高野氏の誠実さ

暫くして、3月18日水曜日、昼食を早目に済ませて、開場前に「ホテル・ヒルトン東京」の「ステッキのチャップリン」店の前に展示されているチャップリンの遺品つまり高野虎市氏(1885~1991)の写真や遺品の数々を鑑賞したり、撮ったりして……2人の生活の一部分とアメリカでの活躍を偲んだ。

特にチャップリンが日本を初めて訪問(1932)された昭和7年に宿泊した帝国ホテルで歓迎に手を振るチャップリンと高野氏ら3人の写真、自宅できつろぐ、美男子で紳士のチャップリンの写真、若き日の精悍な素顔のチャップリン。他に帽子、チョビ髭、ワイシャツと燕尾服、ダブダブのズボン(若い人の今風)、ドタ靴。これが80年前の世界の映画スター(超人的)チャップリン風のスタイルだった。このスタイルが当時、世界の映画ファンに愛された所以と思われる。映画以外では、この格好は好ましく思っていないかつたという。トレードマークのチョビ髭などは、写真で

観る限り役柄によって、多く利用されていた。女優の水谷八重子氏らとの写真もあった。他に、剣劇遠山尚一座を訪問された時のチャップリン一行11人が座員と一緒に撮った写真。最前列にチャップリンを中心に、高野氏は帽子を手に最上段に座り写っていた。チャップリンが使用、改良したステッキ



若き日の精悍なチャップリンの写真が飾られたウインドの前で筆者。右下に彼が愛用したステッキの一部

も数点、写真とウインドに飾ってあった。  
「ステッキのチャップリン」店は、名の通り1500種以上の各種型の違った品が揃っている。作家である田辺聖子氏や瀬戸内寂聴氏も愛用されているようである。



映画とチャップリンの物真似が上手で、造詣の深い芸人と並んで記念撮影する筆者(左)

最初はチャップリンの運転手だった高野氏は、勤勉さと誠

実さ、それに口の堅さが認められ秘書に抜擢され、18年間にわたって仕え務め上げた。チャップリンと日本の交流は意外



色々な映画に主演したチャップリンのトレードマークのチョコ髭とプロマイド

なところになつたことを発見した。

地下からエレベーターに乗り、一階ロビーの右奥のセントジョージ・バー入口で、入場者の入場券を切つて入れていた。傍らにはチャップリンの等身大のオブジェが置かれ歓迎に一役買つていた。

私はカメラを持って、ついっかかりして、ポケットに入場



ホテル・ヒルトン東京内のバーで開かれたトーク・ショーで会話が弾んだ大野裕之氏とユージーン氏

券を入れたまま入つてしまつた。場内にチャップリンを真似る人(芸人)がいて、その話に夢中になり聞き入っているうち入場券を出さず席についた。すでに上席テーブルには司会者(主催者)を始め、

女優の二代目水谷八重子氏、世界的に活躍しているバス・バリトンの岡村喬生氏など10人ぐらいの方々が席に着いていた。司会者によって、紹介されるまで全く知りませんでした。他に「黒柳徹子氏や永六助氏なども出席云々」と言つていましたが、欠席されていた……。

定刻に少し遅れて、司会者が昨日17日、大阪から来て当ホテルに宿泊しているユージーン・チャップリンを迎えた経緯について話された。その間にテーブルの席は埋まつていった。そのつどコーヒー、ケーキが配られた。

そんな中、ユージーン・アンソニー・チャップリン夫妻と大野裕之氏(通訳)が入つてきた。3人は大拍手で迎えられ席に着く。

静まつたところで、大野氏が紹介されマイクを持った。少し間をおいて、チャップリン夫妻との関わりを述べ改めて紹介し、自分をチャップリン研究者と謙遜して、ユーモアを交えて話され、ユージーン・チャップリンの父である「チャップリン生誕120周年記念」を称賛し、かつ映画製作に対する企画、情熱、忍耐力に驚きを覚えたという……。そしてチャールズ・チャップリンの偉大さと映画の数々を掲げて解説された。

この後、主役であるユージーン氏とのトークを織り混ぜて、チャップリンの映画製作にかけた想いや人間性(愛)、映画俳

優としてのエピソード、人並み以上の行動力なども披露し、良く笑わせてくれた。

ユージン氏は「父は日本人が好きだった。日本人の人達から貰った日本人形、刀、着物、下駄など土産として贈られたことを覚えていて、懐かしそうに話してくれた。

前述した代表的な映画は「キッド」「モダンタイムス」「独裁者」「黄金狂時代」「サーカス」「街の灯」など、私の最も好きな映画（サイレント時代も含む）である。

あのユーモアとスピード、それに道化紳士のチョビ髭は親しみ易く慕わしい感じを受ける。この辺りが世界の人のびとの心理が通うチャップリンの斬新さと表現力に他ならない。

ユージン氏曰く「父は、映画と違って生真面目で子どもたちと良く遊び、悪いことをした時は怒り、その理由を分かるまで、二日も三日も論してくれた」と。ユージン氏は8人兄弟（姉妹）の中で生活を共に育った人で、とても父を尊敬し、家庭的だったと述べている。

実はトークで知ったことですが、チャップリンは生涯で3回結婚していたことで、子供の多いことが理解できた。チャップリンは晩年、故郷イギリスでなく、スイスで亡くなるまで子供達を育て……25年間に亘って活動していたといふ。

『伯爵夫人』は最後の映画となっている。  
チャップリンは、亡くなる5年前にアメリカに受け入れら

れた。そしてアメリカの映画芸術科学アカデミーが贈る最高栄誉、最も権威のあるアカデミー賞を受賞している。

## ユージン氏の入場券のサイン

偉大なるチャップリンの感性

トークが終わるころ、会場からなぜ「チャップリンはアメリカから追放された」か質問があった！

ユージン氏曰く「父は、イギリス生まれで、たまたまアメリカで映画を作っていた。戦争のプロパガンダでハリウッドをコントロールし始めた。アメリカでチャーチルをコントロールしようとした」「父は、アメリカ映画に、ハリウッドに影響のある人だったので、アメリカがコントロールし始めた」他に映画での反戦メッセージ等が批判され、興業的に行き詰まる。

映画「タイムライト」のプレミアの件でイギリスに行き、アメリカに戻るつとすると、ロンドンで移民局は入国を拒否した。この時、1952年から追放された。チャップリンの生活基盤は、スイスの湖の近くに、「アルプスの観える家」の広さは、小学校の23校分ぐらい在った」と言い、綿々と話してくれた。

ユージン氏と大野氏のトークは素晴らしく楽しかった。  
流石にチャップリンの研究者らしく、チャップリンの分析と

秘められた部分を掘り下げて、トークに入れて通訳してくれた。

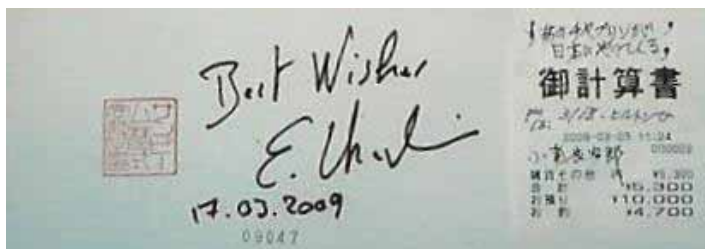
終わりに、ユージーン・アンソニー・チャップリン夫妻と大野裕之氏に盛大な拍手と感謝の賛辞をもって、トークショーの幕は下りた。

その後、ユージーン・チャップリン夫妻と会場のいたると



チャップリン像を挟んでユージーン氏と記念撮影（シャッターは夫人）

ところで記念写真を撮っていた。私はユージーン・チャップリン夫妻と撮った後、好運にして、ポケットに持っていた入場券にユージーン氏のサインをいただいた。サインは日付の17・03・2009と名前（写真㊦）だったが、私は感激のあまり握手をくりかえした。



最後にユージーン氏と私が父チャップリンのオブジェを挟んで、夫人にシャッターを押していただいた。入場券のサインといい、ユージーン夫妻との写真といい、オブジェを挟んだ写真などは、世界に一枚の記念すべき写真となった。他に水谷八重子氏との写真も貴重な一枚として保存している。

私は、映画の獨創性からみてチャップリンは、製作、監督、主演、脚本、音楽まで一人でやる多彩な能力の持主であったことを聴き、深い感銘を受けた。しかも確固たる信念と誰にも真似の出来ない鋭い創造性と哲学を持っていたことだった。また映画製作を媒体として自己表現（主張）をしてきたことは否めない事実で、偉大なる世界の喜劇王・人間チャールズ・チャップリンの感性の一端と、映画で観る破天荒なチャップリンとそうでない真摯な人間味のあるチャップリンの両面を聴く時間を持てたことに、また一枚のパンフレットに満腔の謝意を申し上げたい！